

ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
—英語の発想なども視野に入れて—

伊関 敏之\*

A Study of the Structure of Words and Combination of *kanji*

—in View of English Way of Thinking and so on—

Toshiyuki ISEKI

Abstract

In this paper, we will examine the structure of words and combination of *kanji*.

In that case, we will take English way of thinking and so on into account.

It seems to us that cognitive linguistics has provided very useful insights in almost every field of linguistics.

It says in the theory that “when the form has changed, the meaning has changed, too.”

We will focus on the combination of two characters of *kanji* in various aspects along this line.

Finally, we will state a few problems to be solved in the future.

序論

我々が普段無意識のうちに使っている日本語には、漢字2文字で構成されている語が実に多い。筆者も日本語に関してはネイティブ・スピーカーであるわけだが、実際以下に出てくるような諸例について、日頃からどれほど注意を払って用いているかといえば、はなはだ自信がなくなるのである。それだけ意識をせずに、使っているということになり、このことは英語の語彙に対するネイティブ・スピーカーも同様であろう。

本論文では、日本語に取り入れられている漢字2文字で構成されている語に焦点を当てて、その2文字の漢字を逆さまにしても意味が成り立つものをいろいろと考察することを主な目的とする。その際に注目すべきことは、ある漢字2文字とそれを逆さにした漢字との間には、いろいろ興味深い現象が見られるということである。つまり、その両者の間の意味がほとんど同じであったり、少し違っていたり、大分かけ離れていたりと、さまざまであるということである。仮にほとんど同じ意味であっても、認知言語学でよく言われているように、「形が変れば意味が変わる」と考えなければ、ことばの意味を正しくとらえることはできないのである。このような現象に対して、どのように考えればよい

---

\*北見工業大学教授 Professor, Kitami Institute of Technology

のであろうか。

換言すれば、ことばに対する感覚を磨いて、英語延いては言語に対する視野を広げて、今後の研究活動に活かすことがここでの一番重要なテーマである。

筆者は日本語学、日本語文法、および漢文の専門家ではないので、ところどころ正確ではない箇所(記述)があるかもしれないが、今後の研究の方向性を示した一つの報告として受け止めて頂きたい。

## 1. 2文字の漢字の具体例

### 1. 1. 意味による分類

まずは意味による分類を見てみよう。1. 2つの漢字を逆さにしても意味にほとんど違いがない場合、2. 2つの漢字を逆さにすると意味に少し違いがある場合、3. 2つの漢字を逆さにすると意味が大きくかけ離れる場合の3つのタイプについて、手元にある国語辞典を参考にしながら詳しく考察することにする。なお、それぞれのペアの説明の最後に、「並列」や「上下同義」などの用語が出てきているが、そのことに関しては後述する。

(1. 1. 5. 4つのセクションそれぞれの頻度の調査と内容の検討および1. 2. 文法関係による分類の項を参照のこと。)

#### 1. 1. 1. 2つの漢字を逆さにしても意味にほとんど違いがない場合

**先祖－祖先** (前者＝①家系の初代の人。②その家の今生きている人より前の代の人。祖先。

後者＝①家の血筋としてさかのぼれる最古の人。②その家の今の代より前の人々。)

**違い**＝先祖返りとは言いが、祖先返りとは言わない(その他はほぼ同じ)。

**先は昔(はじめ)の意味で、祖は家系の初代の意味である。両者とも並列。**

**保留－留保** (前者＝すぐに決めてしまわずそのまま少しとめておくこと。後者＝①その場で処理・決定しないで、しばらくそのままにしておくこと。保留。②法律・条約などにおいて、権利や義務の一部に制限をつけて保持しておくこと。)

**違い**＝後者の方が、法律等で使える②が加わっているので、意味が少し広い。

スピーチ・レベルでは、後者の方が少しフォーマルな感じがする(例えば、「判断保留」

vs. 「判断留保」など)。保留は保って引きとめるという意味であり、留保は引きとめて保つという意味である。両者とも並列の意味。

**慣習－習慣** (前者＝古くから伝えられひきつがれている、ある社会一般に通じるならわしやしきたりの意味。後者＝①古くから慣例・しきたりとして行われていること。風習。②あることをくりかえし行うことにより、それがその人のならわしとなること。)

**違い**＝②の意味がある分、後者の方が意味が少し広い。それに加えて、前者には慣習法という言い方があるが、後者にはない(×習慣法)。両者とも上下同義。

**関連－連関** (前者＝つながりがあること。関係。連関。後者＝物事が互いにつながりをもつこと。また、その関係。関連。)

ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

違い＝国語辞典の定義上は違いなし。私見では、後者の方が言い方が堅苦しい。両者はすなわち、ほとんど同じである。両者とも上下同義。

器機－機器 (これは両者とも同じ項目で扱っている。機械・器械・器具の総称。)

違い＝ないに等しいくらいである。強いて言えば、「器」と「機」という漢字からくるニュアンスの違いくらいであろうか。それぞれの漢字が前に来るか後に来るかで、この場合どれほどの違いになるのか不明である。「はたらき」という部分で、共通。「器(うつわ)」と「機械の機」では元は違う。ここでは両者とも上下同義にしておく。あるいは、並列。

明言－言明 (前者＝はっきり言うこと。言明。後者＝はっきりと言うこと。明言。)

違い＝定義上はなし。私見では、後者の方が少しフォーマル。明言は明らかに言う(述べる)ということで、(述語 補語)の意味。言明は言(ことば)を明らかにする(述語 補語)の意味。両者とも(述語 補語)。

見識－識見 (前者＝①物事を見通すすぐれた意見や的確な観察・判断。②気位。後者＝物事を正しく判断する能力。見識。)

違い＝②がある分、前者の方が少し意味が広い。さらに、前者には見識張るという言い方があるが、後者にはない(×識見張る)。両者とも並列。

栄光－光荣 (前者＝①大きなほまれ。光荣。名誉。②幸いを表す光。瑞光。後者＝ほまれ。名誉。また、そのさま。)

違い＝②の意味がある分だけ、前者の方が少し意味が広い。両者とも上下同義。

出現－現出 (前者＝現れ出ること。後者＝物事や状態があらわれでること。あらわしだすこと。出現。)

違い＝ほとんどないが、後者には、あらわしだすことという意味が多く付け加えられている。さらに、私見では、後者の方が堅苦しい言い方である。

両者とも上下同義。

心身－身心 (これは両者とも同じ項目で扱っている。こころとからだ。精神と肉体。)

違い＝国語辞典の定義上は、ないと言ってよい。ただし、この定義通りだとすると、前者の方がよいことになる。つまり、最初に「心」が来て、次に「身」が来る語順の方がより自然だというのが私見である。英語の **mind and body** に相当する。両者とも並列。

出所－所出 (前者＝①刑期を終えて刑務所を出ること。②出どころ。出処。③生まれた所。出生地。後者＝うまれ。出生。②出どころ。出所。)

違い＝①の意味がある分、前者の方が少し意味が広い。さらに、私見では、前者の方が堅苦しくなく、使用頻度が高い。出所は現れ出る所という意味(修飾語 被修飾語)であり、所出は居所から現れ出るの意味(述語 補語)である。両者の文法関係に違いがある。

学修－修学 (前者＝一定の学問や技術を学び修めること。後者＝学問を修め習うこと。)

違い＝国語辞典の定義上は、同じ意味だと言ってよい。ただし、後者には修学旅行とい

う言い方があるが、前者にはない（×学修旅行）。学修は学を修めるという意味（述語補語）であり、修学は修められた学という意味（修飾語 被修飾語）である。両者の文法関係に違いが見られる。

**愛情—情愛**（前者＝①愛し、いつくしむ心。深く思いやる気持ち。②異性を恋い慕う気持ち。後者＝愛する気持ち。なさけ。愛情。）

違い＝定義で用いられていることばが微妙に異なるが、ほぼ同じ内容である。

ただし、前者には、②の意味もあり、意味が少し広い。「愛」は異性を恋い慕う心、恋愛の意味であり、「情」は異性を慕う心、愛情の意味である。文法的には、両者とも上下同義。

**情熱—熱情**（前者＝あることに全力でぶつかり、今にももえたつような強い感情。熱情。後者＝①熱烈な情愛。②熱心な気持ち。情熱。）

違い＝定義に使われていることばは多少異なるが、ほぼ同じ意味である。ただし、①の意味がある分、後者の方が少し意味が広い。さらに、前者には情熱的という言い方があるが、後者にはない（×熱情的）。情熱は心（気持ち）が熱いという意味（主語 述語）であり、熱情は熱い心（気持ち）という意味（修飾語 被修飾語）である。両者の文法関係は異なっている。

**苦勞—勞苦**（前者＝何かをなすにあたって、肉体的、また精神的にほねをおること。後者＝労力と苦心。精神的肉体的に苦しむこと。）

違い＝定義上のことばは多少異なるが、意味内容はほぼ同じである。ただし、前者には苦勞性や苦勞人という言い方があるが、後者にはない（×勞苦性、×勞苦人）。両者とも上下同義。

**議論—論議**（前者＝たがいの意見の違いや正しさなどを述べ合うこと。また、その意見の内容。後者＝問答をして、物事の道理をはっきりさせること。たがいに意見を述べ合うこと。議論。）

違い＝定義上の説明は多少異なるが、ほぼ同じ意味内容である。ただし、次のような使い方の方が、自然なようである。選挙制度の議論、党内論議（NHKニュースより）。「議」は論じる（語る）の意味であり、「論」は説き述べるの意味である。両者とも上下同義。

**論争—争論**（前者＝二人以上の人たがいに自分の意見を主張して論じ争うこと。論戦。後者＝言い争うこと。論争すること。）

違い＝内容的には、ほとんど違いが区別できない。限りなく同じ意味に近い。ただし、私見では、後者の言い方の方が少しフォーマルなような気がする。

さらに、次の2つの例を見れば、やはり全く同じと言うわけにはいかないということがわかる。以前、平泉渉氏と渡部昇一氏との間で大変話題になった論争があり、その本のタイトルは『英語教育大論争』である。また、以前テレビのニュース番組の中で、『多事争論』というコーナーがあった。この2つの表現は、それぞれこのままの方が自然であると筆者には思われる。もし仮に、『英語教育大争論』とか『多事論争』とかいうタ

ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

イトルでは不自然な感じを受けるというのが私見である。やはり、「形が変れば意味が変る」ということが、ことばにおける自然な法則ということであろう。論争は論を争うということ(述語 補語)であるが、争論は争われた論ということ(修飾語 被修飾語)である。両者の文法関係は異なっている。

**評論—論評** (前者=物事の価値・よしあしなどを批評して意見を述べること。また、その文章。後者=事件や作品について内容を論じて批評すること。また、その文。)

違い=後者には、事件や作品についてという説明があるので、前者よりも対象が少し狭いと考えられる。また、前者には評論家という言い方があるが、後者にはない(×論評家)。「評」は物の良し悪し、価値などを論じ定めるの意味であり、「論」は事の道理、または、是非善悪を述べるの意味である。

両者とも上下同義。

**決議—議決** (前者=会議であることがらを決定すること。また、決定したことがら。後者=会議などで決定すること。また、決定されたことがら。)

違い=国語辞典の定義の上では、同じと考えてよい。ただし、私見では、後者の方がフォーマルな言い方である。また、辞書には用例として次の2つが載っている。決議事項と議決機関である。この2つを入れ替えてしまうと、少し不自然な言い方になるであろう。「決議」は結論を出した意見という意味(修飾語 被修飾語)であり、「議決」は諮って結論を出すという意味(時間的前後)である。両者の文法関係は異なっている。

**分配—配分** (前者=①分けて配ること。②《経》労働者に対する資金、出資者(株主など)に対する配当というように、生産に参加した者がその分け前を受け取ること。後者=割り当ててくばること。分配。)

違い=意味的には非常に似ている。ただし、前者には後者とは違って《経済》で使う用語としての用法があるということである。両者とも並列。

**余剰—剰余** (前者=余り。残り。剰余。後者=あまり。残り。余分。)

違い=これだけでは、ほとんど違いがない。ただし、用例をよく見てみると、多少の違いが見られる。「余剰物資」「余剰価値」「剰余金」の3例が載っているが、余剰と剰余を入れ替えてもOKのようである。ただし、剰余の項目には、剰余価値として次のような説明が出ている。《経》労働者が原料を加工し製品化することによって新たにつくりだした価値(付加価値)から労働力の価値(賃金)を差し引いた残りのもので、資本家が利潤として手に入れるものとある。つまり、この経済用語としては、剰余価値という言い方がふさわしいということであろうか。さらに、細かく見ると、次のような違いもある。余剰人員とは言うが、剰余人員とは普通言わない。また、剰余には、次のような用法もある。わり算で、わり切れないで残った数(余りのこと)。

この用法は余剰にはない。両者とも上下同義。

**回転—転回** (前者=①ぐるぐるまわること。②《物》物体が一つの軸や点を中心に円運動をすること。

③頭脳の働き。「頭の回転がはやい」④仕入れた商品をさばいた金で次の商品を仕入れることのくり返し。「商品の回転をよくする」⑤滞らず、なめらかに流れること。「客の回転が悪い」後者＝くるりと回って向きを変えること。くるりと回って向きが変わること。回転。）

違い＝前者の方が断然意味範囲が広い。例えば、③～⑤に載っている用例に使われている「回転」を「転回」に変えることはできない。ただし、転回しか使えないような例もある「進路を南に転回する」「コペルニクスの転回」。

両者とも上下同義。

**集結－結集** (前者＝一か所に集まること。また、集めること。「物資を集結する」後者＝散り散りのものが、まとまり集まること。また、まとめ集めること。「力を結集する」)

違い＝辞書的な定義上は、ほぼ同じ意味である。ただし、用例にあるように、「物資を集結する」や「力を結集する」のような言い方の時には、両者を入れ替えると多少不自然な表現になる。両者とも上下同義。

**接近－近接** (前者＝①近寄ること。②差が縮まってくること。「力が接近する」③親しくなること。「米中接近」後者＝①近くにあること。②近寄ること。接近。)

違い＝前者の方が少し意味が広い。また、用例「力が接近する」「米中接近」の中で用いられている「接近」を「近接」に変えることはできない。「接近」の「接」は近づくの意であり、「近」も近づくの意（上下同義）である。一方、「近接」は近くに接するの意（述語 補語）である。両者の文法関係には違いが見られる。

**途中－中途** (前者＝①目的地へ向かっていくあいだ。道中。途上。②物事のまだ終わらないうち。中途。後者＝途中。道の中ほど。物事の半ば。)

違い＝意味的に類似した部分も多いが、違いも見られる。私見に基づいて、両者の用法上の違いを説明してみると、次のようになる。「中途採用」と言うが、「途中採用」とは言わない。「中途半端」と言うが、「途中半端」とは言わない。学校から帰る途中（で）、彼に会ったという言い方においては、「途中」を「中途」に変えると不自然である。何でも中途／途中で投げ出してはならないという言い方においては、「中途」も「途中」も両方ともOK。以上、意味的には大変似通っているが、やはり用法上違いが見られるのである。「途中」は途の中ほどということ（修飾語 被修飾語）であり、「中途」は中ほどの途（みち）ということ（修飾語 被修飾語）である。両者とも同じ機能。

**始終－終始** (前者＝①はじめから終わりまで。全部。②いつも。絶えず。後者＝①はじめと終わり。②はじめから終わりまで同じ状態を続けること。初めから終わりまで。しじゅう。いつも。)

違い＝私見では、意味的にはほとんど違いがないように思えるが、用法上はやはりいくつか異なる。「防戦に終始する」とは言えるが、「防戦に始終する」とは言えない。「終始攻勢に出る」とは言うが、「始終攻勢に出る」とは言わない。「終始一貫」という4文字熟語はあるが、「始終一貫」という4文字熟語はない。「始終気にしている」というと

ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

ころは、「終始気にしている」という言い方をしてもよい。両者とも並列。

**遊歴—歴遊** (前者＝各地を歩き回ること。後者＝各地をめぐり歩くこと。遊歴。)

違い＝これだけの情報なので、現段階では違いを見分けることはできていない。今後の課題としたい。「歴」は次から次への意。従って、「遊歴」は次から次へと歩き回ることの意味(述語 補語)であり、「歴遊」は歩いて過ごすの意味(述語 補語)である。両者とも同じ文法関係にある。

**便利—利便** (前者＝都合のよいこと。役に立つこと。後者＝便利なこと。都合がいいこと。)

違い＝定義上は、ほとんど同じである。ただし、用法上では違いが見られる。「便利屋」(×利便屋)。「利便をはかる」(×便利をはかる)。「便」は都合がよい、やりやすいの意で、「利」はよい、都合がよい、効用(効き目)があるの意。両者とも上下同義。

**産物—物産** (前者＝①その土地で産するもの。②ある状態・環境・ことがらから、結果として生まれたもの。後者＝土地の産物。)

違い＝前者の方が意味が広い。後者には前者の②に当たる意味がない。従って、「努力の産物」「封建社会の産物」という時、「産物」を「物産」に変えることはできない。ただし、次のような言い方の時には、「物産」の方が用いられる。「物産展」(×産物展)。「産物」はつくり出したものという意味(修飾語 被修飾語)であり、「物産」は物をつくり出すという意味(述語 補語)である。両者の文法関係には違いがある。

**異変—変異** (前者＝①変わること。変化。②変わったできごと。後者＝①変わったできごと。異変。②《動・植》同一種類の生物の間で形態・性質が相違すること。)

違い＝意味が類似しているが、《動物・植物》用語として使える後者の方が意味が広い。私見では、次のような用法上の違いも見られる。「突然変異」(×突然異変)。「異変に気づく」(×変異に気づく)。「異」は変な(普通でない)の意であり、「変」は正常でない(普通でない)の意である。両者とも上下同義。

**製作—作製** (前者＝機械・道具などを作ること。後者＝ものを作ること。製作。)

違い＝前者には作るものについての制限が設けられており、後者にはない。例えば、「自動車の部品を製作する会社」という時、「自動車の部品を作製する会社」と言っただけだと、筆者には多少違和感が残る。両者とも上下同義。

**腹心—心腹** (前者＝①心の奥底。真心。②心から信頼できる人。後者＝①胸と腹。②心の中。)

違い＝大変よく似ているが、微妙に異なっている。特に、後者には前者の②に相当する意味がないのが注目される。従って、「腹心の部下」とは言えるが、「心腹の部下」とは言えない。また、「心腹に落ちる(＝納得がゆく)」とは言えるが、「腹心に落ちる」とは言えない。両者とも並列。

**物事—事物** (前者＝人間の意識の対象となる物と事。いっさいのことがら。《参考》「事物」にくらべ、「物」よりも「事」に重点を置いた言い方。後者＝①ものごと。②《法》事件と目的物。)

違い＝後者には、②のような法律用語があるというのが注意点。その他は類似している。

ただし、《参考》で説明されている内容が正しいとすると、2つの漢字のうち後ろに来た語の方に重点が置かれるということは、大変注目に値する。ということは、「事物」の場合には、「事」よりも「物」の方に重点が置かれているということになる。この点に関しては、後述する（バナナワニ vs. ワニバナナ）。それから、読み方が違うことにも注意（一方は音読みで、もう一方は訓読み）。両者とも並列。

**下降—降下**（前者＝下の方にさがること。おりること。後者＝①高い所からおりること。さがること。②（命令などが）高い地位の人から出ること。）

違い＝後者の方が意味が広い。②の意味が加わっていることに注意。従って、「大命降下」とは言えるが、「大命下降」とは言えない。その他、次のような違いも認められる。急降下（×急下降）。「気温の降下」（×気温の下降）。「下降線をたどる」（×降下線をたどる）。「下降」は下に降りる（述語 補語）という意味である。「降下」は「降」がおりる（くだる）の意であり、「下」はくだる（さがる、おりる）の意であるので、上下同義。両者の文法関係が異なっている。つまり、同じ漢字を使っている、文法関係が変わる可能性があることを意味しているのである。

**土壌—壤土**（前者＝①つちくれ。つち。②作物の育成する土地。③《地質》岩石が崩壊・分解したものに、動植物のくさってできた有機物質の混じったもの。後者＝①土。②《農》粘土を二十五—三十七・五パーセント含んだ土。砂土と埴土との中間の土。水の吸収力がよく肥沃で耕作に適する。）

違い＝それぞれが地質と農業の専門用語として用いられているということが興味深い。従って、学問的定義が異なっていることになる。さらに、前者には②の意味があるので、「土壌が肥えている」ということが可能（×壤土が肥えている）。両者とも上下同義。

**原野—野原**（前者＝人手の加わらない自然のままの広い野原。後者＝草などが生え、人家のない広い平地。）

違い＝漢字を入れ替えただけではなく、読み方が異なっている（前者が音読みで、後者が訓読み）。意味的には類似しているが、前者の方が意味が少し狭いようである。サロベツ原野（×サロベツ野原）。両者とも上下同義。

**安泰—泰安**（前者＝安全で無事なこと。やすらかなこと。後者＝安らかなさま。安泰。）

違い＝意味にほとんど違いが見られない。私見では、後者の方が少しフォーマルな言い方である。また、次の用法に注意。「彼がいる限りこのチームは安泰だ」（×彼がいる限りこのチームは泰安だ）。「安」はやすらかなの意であり、「泰」はやすらか、落ち着いているの意。両者とも上下同義。

**辛苦—苦辛**（前者＝つらく苦しいこと。つらい目にあい、苦しむこと。後者＝難儀すること。辛苦。）

違い＝定義上は、ほとんど違いが見られない。ただし、次の例に注意。「艱難辛苦」（×艱難苦辛）。「辛」はつらい、苦しいの意であり、「苦」は苦しい、苦しむの意である。両者とも上下同義。



ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

1. 1. 2. 2つの漢字を逆さにすると意味に少し違いがある場合

**感情—情感** (前者=①喜怒哀楽・快不快などの心の状態。気持ち。心持ち。②外からの刺激に反応して起こる心の変化。後者=人の感情に訴えて情緒を起こさせる独特の感じ。気持ちや感情。)

違い=似てはいるが、意味が微妙にずれている。従って、次のような例においては入れ替えは不可。「感情の起伏が激しい」(×情感の起伏が激しい)。「忠告されて感情を害する」(×忠告されて情感を害する)。「感情移入」(×情感移入)。感情家(×情感家)。「感情的」(×情感的)。「感情論」(×情感論)。「情感をよぶ」(×感情をよぶ)。ただし、次の例においては、両方とも可能。「情感の豊かな人」(○感情の豊かな人)。「感情」は感じる(感動する)心(気持ち)という意味(修飾語 被修飾語)であり、「情感」は「情」気持ち(心)が感じる(感じひびく・うごく)という意味(主語 述語)である。両者の文法関係には違いがある。

**対応—応対** (前者=①あるものが他のものに対して、反対・相似など一定の関連をもつこと。相対する関係にあること。②相手の動き、状況の変化に応じて行動すること。③つり合うこと。見合っていること。後者=相手の話を聞き、適切にうけこたえすること。)

違い=前者の方が明らかに意味が広い。また、意味内容もずれている。強いて言えば、後者は前者の②の意味に近いが、やはり意味的にずれがある。つまり、簡単には置き換えることはできないということを意味する。いくつか用法を見てみよう。「AとBが対応する」(×AとBが応対する)。「対応策を考える」(×応対策を考える)。「収入に対応した支出」(×収入に応対した支出)。ただし、次の例では両方とも可能。「係員の対応」(○係員の対応)。

両方ともこたえる、応じるという意味。両者とも上下同義。

**階段—段階** (前者=高さの違う場所へ行くための段になった通路。②順序にしたがって進む等級。段階。後者=①物事の進展する一くぎり。②等級。③物事・仕事の順序。)

違い=意味内容がずれている。強いて言えば、前者の②と後者の②が似ているが、これとても同じではない。いくつか用例を見てみよう。「準備の段階」(×準備の階段)。「段階(=等級)をつける」(×階段をつける)。「段階をふむ」(×階段をふむ)。両者とも「きざはし(=階段)」の意。両者とも上下同義(その割には、意味のずれが大きい)。

**法律—律法** (前者=《法》国家で定めた規則。法令。後者=①おきて。法律。②《仏》戒律。)

違い=②の意味がある分、後者の方が意味が広い。両者とも上下同義(きまり、おきて、さだめの意味)。

**運命—命運** (前者=①人の意志ではどうにもならない、幸・不幸のめぐり合わせ。宿命。

②将来の成り行き。後者=(そのものの生存にかかわるような) 運命。)

違い=後者の方がより限定された運命のこと。次のような用法の違いが見られる。「命運も尽きる」(×運命も尽きる)。「運命をかける」(○命運をかける)。「運命論」(×命

運論)。両方とも「めぐりあわせ」の意。両者とも上下同義。

君主—主君 (前者＝世襲によって位につき、一国の主権を有する統治者。皇帝。天子。後者＝自分の仕えている君主。主人。)

違い＝類似してはいるが、少し違いがある。後者には自分の仕えているとい意味が加わっている。意味が狭くなっている。また、次のような用例においても違いが認められる。「専制君主」(×専制主君)。「君主国」(×主君国)。「君主政体」(×主君政体)。

「君」は天子また、諸侯・領主。また、人の上に立つべき徳のある人のこと。「主」はぬし、あるじ、中心となる人、家長、きみ、支配する者、かしらという意味。従って、意味分類は難しい。可能性としては、「並列」と「上下同義」ということになるが、下線部が重なり合うということによって、ここでは両者を後者の「上下同義」として分類しておく。

少年—年少 (前者＝年の若い者。主に十代の男の子。未成年者。後者＝年の若いこと。また、その人。)

違い＝年の若い者(人)の意味では共通。年の若いことの意味もあるので、後者の方が意味が広い。次のような用法上の違いに注意。「少年院」(×年少院)。「少年鑑別所」(×年少鑑別所)。「少年団」(×年少団)。「少年老い易く学成り難し」(×年少老い易く学成り難し)。「年少者」(×少年者)。「年少組」(×少年組)。「少年」は若い生まれてからの年(年齢)の意味(修飾語 被修飾語)であり、「年少」は生まれてからの年(年齢)が若いという意味(主語 述語)である。つまり、このペアは文法関係が異なっている。

親近—近親 (前者＝①身近に近づいて親しみなじむこと。②みうち。③そば近く仕える者。側近。後者＝血筋の近い親族。「近親結婚」)

違い＝前者の方が意味が広い。また、表す意味が少しずれている。「近親結婚」のところを「親近結婚」とは言えない。さらに、「親近感」とは言うが、「近親感」とは言わない。両者とも並列。

転移—移転 (前者＝場所が移ること。場所を移すこと。後者＝①場所・住所を移すこと。ひっこし。②物事が他に移ること。)

違い＝②の意味がある分、後者の方が意味が広い。その他の点については、定義上は類似しているが、用法上の守備範囲が違うようである。「癌が転移する」(×癌が移転する)。「会社を移転する」(×会社を転移する)。「転」はうつる、うつす、場所が変わるの意。「移」はうつる、ほかへ行く、動く、変わるの意。両者とも上下同義。

礼儀—儀礼 (前者＝社会の慣習による敬意の表し方。礼の作法。後者＝形式・手順をととのえてする礼儀作法。礼式。)

違い＝下線部のような限定的な意味が加わっている。後者の方が少し意味が狭い。次の例においては、互換が不可能。「礼儀正しい」(×儀礼正しい)。「儀礼的(＝形式的)なあいさつ」(×礼儀的なあいさつ)。「礼」は社会の秩序・慣習、きまり・おきて、儀式、作法のこと。「儀」は正しい立ち居振る舞い、礼法にかなった動作進退のこと。両者とも並列。

ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

**敵対—対敵** (前者=敵意をもって対抗すること。はむかうこと。後者=①敵軍と相対すること。立ち向かうこと。立ち向かう相手。)

違い=似てはいるが、意味にずれがある。「敵対」は敵と相手になる(敵を相手にする、敵とはりあう)の意味(述語 補語)であり、「対敵」ははりあう敵の意味(修飾語 被修飾語)である。つまり、両者の文法関係は異なる。

**要綱—綱要** (前者=物事の根本を成す、たいせつなことがら。また、それをまとめたもの。綱要。「要約した大綱」の意。後者=物事の要点となる大切なところ。本の名前に用いられる。)

違い=前者の意味範囲が広い。「法案の要綱」「採用試験実施要項」「国文学要項」「生物学要項」などと書物や文章の題名などに使われる。綱要が置き換えられるのは「国文学綱要」「生物学綱要」のように本の名前の時だけである。

「要」は①かなめ、大切なところ、かんじん、もと。②しめくくる、大事な点をつづめまとめるの意。後者=物事の根本となるものの意。この可能性も「並列」か「上下同義」のどちらかで迷うところである。意味的に完全に同義ではないが、類似した意味を表すので、ここでは両者とも「上下同義」として分類しておく。

**読解—解読** (前者=文章を読んで内容を理解すること。後者=わかりにくい文章や暗号などを読み解くこと。)

違い=表わす意味内容がずれている。次の用法に注意。「読解力を養う」(×解読力を養う)。「通信文の解読」(×通信文の読解)。「読」は意味をよみとる、表現されたものの内容を理解するの意。「解」はさとる、物事の筋道がわかるの意。この2つは意味的に類似しているが、「読んで解する」という関係が成り立つので、ここでは「上下同義」とはせず、両者とも「並列」として分類する。

**前面—面前** (前者=前のほう。表のほう。後者=人の見ている前。目の前。)

違い=「前」ので、「面」は方向の意味。従って、前者は「前の方向」を意味し、後者は「まのあたり(目の前)+まえ」というほどの意味(つまり、目の前)。「面」の意味が、前者と後者と異なっている。いずれにせよ、前者と後者では意味にずれがある。「前面に立ちほだかる問題」(×面前に立ちほだかる問題)。「公衆の面前で恥をかく」(×公衆の前面で恥をかく)。両者とも従属。

**育成—成育** (前者=りっぱに育て上げること。後者=動物などが育つこと。はぐくみ育てること。成長すること。)

違い=意味的には似ているが、用法上には違いが見られる。「人材の育成」(×人材の成育)。「子供がすくすくと成育する」(×子供がすくすくと育成する)。

「育」は育てる、育む、養う、育つの意で、「成」は育て上げる、育つ、実るの意。両者とも上下同義。

**俗世—世俗** (前者=俗世間。世の中。俗界。娑婆。後者=①世間の風習。②世の中。③世間の人。)前者には、「ぞくせい」と「ぞくせ」の2通りの読み方がある。

違い＝後者の方が意味が広い。重なり合うのは、前者と後者の②の意味の時。

「世俗的」(×俗世的)。「世俗にこびる」(×俗世にこびる)。「世俗の塵にまみれる」(×俗世の塵にまみれる)。「俗世を離れる」(×世俗を離れる)。「俗」は世の中、実生活、実社会の意で、「世」は一生を過ごす所、社会生活を営む所、人の世、世の中の意。両者とも上下同義。

**団結－結団** (前者＝多くの人々が、ある目的のもとにしっかりとまとまること。後者＝ある目的のため、人々が集まって団体をつくること。)

違い＝後者には、下線部のような意味が加わっている。また、用法上は以下のような違いがある。「**団結権**」(×**結団権**)。「**結団式**」(×**団結式**)。「**団**」は集まる、集まり、かたまりの意で、「**結**」は集まる、集める、つながって一つにかたまる、約束する、組をつくるの意。両者とも集まる、集めるの意味で共通なので、両者とも上下同義。

**成熟－熟成** (前者＝①農作物が実ること。②人間の心身が十分に成長すること。③情勢や機運がちょうどよい時機になること。後者＝十分にできあがること。)

違い＝前者に比べて後者の定義が簡単すぎるのでわかりにくいですが、両者の間には多少違いがある。「**成熟した肉体**」(×**熟成した肉体**)「**伝統熟成**」(×**伝統成熟**)→筆者が日頃愛用しているサプリメントに書いてあることばより引用。「**成**」は育て上げる、育つ、実るの意で、「**熟**」は熟れる、実る、果実が十分に実る、十分に育つの意である。両者とも上下同義。

ちなみに、英語では次のように使うことができる。**ripe fruit** は熟した果物の意味であり、**a ripe scholar** は円熟した学者のことを意味する。人でも物でも **ripe** が使用可能である (cf. 『研究社高校英和辞典－第二版－』 p.1052)。

### 1. 1. 3. 2つの漢字を逆さにすると意味が大きくかけ離れる場合

**現実－実現** (前者＝観念とは別に現に事実としてあること。また、そのもの。後者＝希望や理想・計画などが現実のものとなること。また、現実のものとすること。)

違い＝私見では、「**現実**」は現に現れている**実体・状態** (修飾語 被修飾語) を表している。つまり、もう既にそうなっているということである。→「**現実をよく見なさい**。」

(×**実現をよく見なさい**)。一方、「**実現**」は実際に現れる行為・状態が起こった**結果**を表している。英語の現在完了 (結果を表す用法) に似ている。つまり、実際に現れるということなので、文法的関係は**述語 補語**である。→「**夢が実現した**。」(×**夢が現実した**)。英語で言うと、前者は **reality** にあたり、後者は **realization** にあたる。両者の文法関係は異なっている。

**理論－論理** (前者＝物事の原理・原則に基づいておし進められた考え。筋道を立てて組み立てた考え。

後者＝①議論の筋道。②物事を合理的に考える方式。③「**論理学**」の略。)

違い＝国語辞典の定義を見ても、違いは明白である。英語で言うと、前者は **theory** にあたり、後者は **logic** にあたる。「**理論家**」(×**論理家**)。「**理論闘争**」(×**論理闘争**)。「**論**

ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

理学」(×理論学)。「理」はすじ、筋道の意で、「論」は説き述べるの意。前者は「理を説き述べる」という関係で(述語 補語)であり、後者は「説き述べられた理」という関係(修飾語 被修飾語)である。

両者の文法関係は異なっている。

明解—解明(前者=はっきりした解釈。わかりやすい説明。後者=わかりにくいことがらを分析して、はっきりさせること。)

違い=私見では、前者は名詞的で、後者は動詞的な性質を持つ。「明解な論理」(×解明な論理)。「なぞを解明する」(×なぞを明解する)。「明解」の「明」は明らかにするの意で、「解」は解き明かす、説明するの意である。よって、明らかに解き明かす(述語 補語)の関係である。「解明」は解き明かして(説明して)明らかにするの意(時間的前後)である。両者の文法関係は異なっている。英語に直して見ると、前者は explain clearly に相当し、後者は explain and clarify に相当する。

該当—当該(前者=そのことに関係しているそのものであること。それを受け持っている。当の。その。後者=一定の資格や条件などに、当てはまること。)

違い=定義上も意味がかなりずれている。「当該官庁」(×該当官庁)。「該当者」(×当該者)。「該」はあたる、その(物を指定することば)の意で、「当」はその、この、こちらのを意味する。両者とも上下同義。

権利—利権(前者=①権勢と利益。②《法》一定の利益を主張し、受けることを法律が一定の資格者に認めた力。③ある事をしてよい、またはしなくてよいという資格。後者=業者が政治家や公務員と結託して得る、利益の多い権利。)

違い=後者の方が意味が狭い。定義上、権利の一部として説明されているが、意味が大きくずれている。「権利金」(×利権金)。「利権屋」(×権利屋)。

「権」は勢い、力、他を支配できる力の意で、「利」利用するの意。「権利」は勢い(力、他を支配できる力)を利用するということで(述語 補語)、「利権」は利用できる勢い(力、他を支配する力)ということで(修飾語 被修飾語)。両者は文法関係が異なっている。

大事—事大(前者=①重大な事件・ことがら。②大きな仕事。大がかりな仕事。③重要なさま。④大切なさま。後者=弱小なものが強大なものに従い、その言いなりになること。)

違い=大きく意味がずれている。「国の大事」(×国の事大)。「大事を控える」(×事大を控える)。「大事な用件」(×事大な用件)。「大事に使う」(×事大に使う)。「大事を取る」(×事大を取る)。「大事ない」(×事大ない)。「事大主義」(×大事主義)。大事の「大」は重要な、責任の重い、勢いの強く大きい意で、「事」はこと、ことがら、物事、出来事、成り行き意である。つまり、文法的には修飾語 被修飾語の関係である。一方、事大は勢いよく、仕える(奉仕する)の意味なので、文法的には述語と補語の関係である。

両者は文法関係が異なっている。

外国－国外 (前者＝自国以外の国。よその国。後＝国の領土の外。)

違い＝当然違いがある。前者は自国以外の「国」を全部含む言い方であり、後者は国の領土の外であれば成り立つ言い方である。従って、例えば、無人島でも空の上でも構わないということになる。「外国語」(×国外語)。「外国人」(×国外人)。「国外追放」(×外国追放)。前者は「外の国」、後者は「国の外」という意味。両者とも従属。

野外－外野 (前者＝①野原。②屋外。後＝①野球で、内野の後方の地帯。②「外野手」の略。③(「外野席」の略)野球場で、外野①に面して設けられた観覧席。④《俗》そのことに直接関係ない、まわりの人々。野次馬。)

違い＝意味が全くずれている。「野外訓練」(×外野訓練)。「野外劇」(外野劇)。「外野が余計な口を出す」(×野外が余計な口を出す)。「野外」は「野」の「外」の意。「外野」は「外の野(＝野球の守備側選手の守る地域)」の意。つまり、「野」の意味が異なっている。両者とも従属。

素質－質素 (前者＝①生まれつき備わっている性質。資質。②将来発展するもととなる性質。後＝必要以上の物を使わず、浪費をできるだけ省くさま。節約しているさま。つましいさま。)

違い＝意味が全くずれている。「踊りの素質がある」(×踊りの質素がある)。「質素な生活」(×素質な生活)。「素」はありのままの意であり、「質」は性質、実体のこと。「素質」はありのままの性質(修飾語 被修飾語)という意味であり、「質素」は性質が素朴である(主語 述語)という意味である。

両者の文法関係に違いが見られる。

運氣－氣運 (前者＝①自然現象に人の運命をあてて判断すること。②運。運勢。後＝一つの方向、運動などに向かっていきそうな動き。時勢。)

違い＝意味が大きくずれている。「運氣がよい」(×氣運がよい)。「政界浄化の氣運が盛り上がる」(×政界浄化の運氣が盛り上がる)。「運」はめぐり合わせ、定め、の意で、「氣」は目に見えない気配。おもむき。両者とも並列。

知人－人知 (前者＝知り合い。後＝人間の知恵・知識。)

違い＝意味が大きくずれている。「知人」は知り合いの人、「人知」は人についての知識のこと。両者とも修飾語 被修飾語。

女子－子女 (前者＝娘。女の子。②おんな。女性。後＝①息子と娘。子供。②娘。女子。)

違い＝意味的に重なっている部分もあるが、かなりずれている。「女子大」(×子女大)。「帰国子女」(×帰国女子)。両者とも並列。

所要－要所 (前者＝ある物事をなすために、必要なこと。また、そのもの。後＝大事な所。大切な地点。)

違い＝意味がずれている。「所要時間」(×要所時間)。「要所を固める」(×所要を固める)。「所要」は物事の要の意であり、「要所」は要の場所の意である。両者とも修飾語 被修飾語。

ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

- 社会—会社** (前者=①共同の生活を営む人間の集団。②世の中。世間。③同類の仲間。後者=営利事業を共同目的として作られた社団法人。株式会社・合資会社・名会社・有限会社がある。) 違い=意味が大きくずれている。「人間社会」(×人間会社)。「会社を休む」(×社会を休む)。「社」は組、仲間、仕事のための同志的団体のことで、「会」はある集団、グループのこと。両者とも上下同義。
- 会議—議会** (前者=集まって相談・議論すること。また、その集まりや機関。後者=①住民に選挙された議員が、人々の意思を代表して活動し、立法・議決をする合議制の機関。②国会。) 違い=意味が全く異なっている。「学術会議」(×学術議会)。「議会政治」(×会議政治)。ただし、次の例では両方可。「会議を開く」(○議会を開く)。「会」は集まり、よりあいの意で、「議」はかる、相談する、評定するの意。つまり、「会議」は会にはかる(相談する)ということ(述語 補語)であり、「議会」ははかるべき集まりということ(修飾語 被修飾語)ということである。  
両者の文法関係に違いがある。
- 事情—情事** (前者=①その事の起きたわけ。②その事に関する細かいようす。後者=男女間の情愛に関すること。色事。) 違い=意味が全く異なっている。「家の事情」(×家の情事)。「事」はこと、ことがら、物事、出来事、成り行きの意で、「情」はありさま、様子の意。つまり、事情は物事のありさま(様子)ということ(修飾語 被修飾語)である。一方、情事は男女間の愛(異性にひかれる気持ち)に関する出来事(成り行き)の意味(修飾語 被修飾語)である。つまり、「情」の語の表す意味に違いが見られる。両者とも修飾語 被修飾語。
- 科学—学科** (前者=①(広義では「学」と同義)ある対象を一定の目的・方法のもとに実験・研究し、その結果を体系的に組み立て、一般法則を見つけ出し、またその応用を考える学問。サイエンス。②(狭義で)自然科学。後者=①学問の科目。②大学などで、専攻別による分科。) 違い=意味が大きく異なっている。「科学小説」(×学科小説)。「科学的」(×学科的)。「英文学科」(×英文科学)。「科」は主として学問上の分類された区分・等級のことで、「学」は組織化された知識の体系のこと。両者とも並列(分類は難しい)。
- 弟子—子弟** (前者=教えを受ける人。門人。門弟。後者=①年少者。②子や弟。) 違い=意味が全く異なっている。「弟子入り」(×子弟入り)。「良家の子弟」(×良家の弟子)。両者の「弟」の読み方が違っている。「弟」は年少者、門人、でしの意で、「子」は子、子供、広く人の意である。両者とも修飾語 被修飾語。
- 身分—分身** (前者=①社会的な地位。階級。②身の上。境遇。後者=①《仏》仏が衆生を救うために種々の姿でこの世に現れること。観音三十三身など。②一つの身が二つ以上に分かれること。また、分かれたもの。③子。子を生むこと。) 違い=意味が全く異なっている。両者の「身」の読み方が違っている。「身分相応」(×

分身相応)。「結構なご身分ですね」(×結構なご分身ですね)。「身分証明書」(×分身証明書)。「私の分身のようなもの」(×私の身分のようなもの)。身分の場合、「身」はわれ、おのれ、自らの意で、「分」は地位、なすべき職務の意(修飾語 被修飾語)である。分身の場合、「分」はわかるの意で、「身」は身、体、肉体の意である。つまり、「分身」は身を分ける(身が分かれる)ということ(述語 補語)である。同じ漢字でもいろいろな意味で使われているということがわかる。両者の文法関係に違いが見られる。

落下一下落(前者=落ちること。後者=①物価・株価・相場がさがること。②等級・品格がさがること。)

違い=意味が大きく違っている。両者の「下」の読み方が異なっている。「落下地点」(×下落地点)。「落下傘」(×下落傘)。「物価・株価の下落」(×物価・株価の落下)。「落」は物を落とす、物が落ちる、下がる、下るの意で、「下」は低くなる、下方に向かう、下る、下す、下がる、下りるの意。両者とも上下同義。

中心一心中(前者=①真ん中。②《数》円周率上または球面上のすべての点から等距離にある点。③非常に大事な所・もの・人。かなめ。後者=心の中。胸中。内心。)

違い=意味が全く異なっている。「経済の中心」(×経済の心中)。「話題の中心」(×話題の心中)。「中心人物」(×心中人物)。「心中穏やかでない」(×中心穏やかでない)。心中を「しんじゅう」と読むと、また意味が全く変わってしまう。中心の場合、「中」は真ん中の意で、「心」は真ん中、真ん中にあるもの、重要な部分の意。上下同義。心中の場合、「心」はこころの意で、「中」はなか、うち、内部の意(修飾語 被修飾語)。両者の文法関係は異なる。

身長一長身(前者=背の高さ。背丈。後者=背の高いこと。また、その人。のっぽ。)

違い=意味が大きくずれている。「彼は身長が高い。」(×彼は長身が高い)。「彼は長身だ」(×彼は身長だ)。身長は「身」が長いということであり、長身は「長い」身であるということ。つまり、前者は(主語 述語)の関係であり、後者は(修飾語 被修飾語)の関係である。両者は文法的関係が異なっている。

数年一年数(前者=いくつかの年。後者=年の数。)

違い=両者には大きな違いがある。「ここ数年の間に」(×ここ年数の間に)。

「年数を重ねる」(×数年を重ねる)。両者とも修飾語 被修飾語。

数字一字数(前者=①数を表わす文字。統計や計算など、数字で表されることがら。後者=文字のかず。)

違い=意味が全く違っている。「漢数字」(×漢字数)。「数字に強い」(×字数に強い)。

「字数制限」(×数字制限)。「数字」は数を表す字のことであり、「字数」字の数のこと。

両者とも修飾語 被修飾語。

部下一下部(前者=ある人の下で、その命令・監督を受ける人。手下。配下。後者=下の部分。下の方。)

違い=意味が全く違っている。「彼は私の部下だ」(×彼は私の下部だ)。「下部組織」(×



ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

部下組織)。

「部」は区分けをしたうちの一つの意であり、「下」は低い方、下方、身分や地位の低い者、従属者の意。「部下」は区分けをした部分での身分の低い者のことであり、「下部」は低い(下の)方の部分のこと。両者とも修飾語 被修飾語。

液体—体液 (前者=一定の体積をもつが、一定の形をもたない流動物質。水・油など。後者=《生》動物の体内を循環し、細胞に酸素や栄養を与えたり老廃物を排泄器官に運んだりする液状のもの。血液・リンパ液および組織液など。)

違い=意味が全く違っている。「液体空気」(×体液空気)。「液体酸素」(体液酸素)。液体は「液上の(形ある)もの」の意であり、体液は「体の中にある液」の意である。両者とも修飾語 被修飾語。

観客—客観 (前者=見物する人。かんかく。後者=①《哲》(ア)認識作用の対象となるすべてのもの。(知るという主観のはたらきに対して、知られるもの。)(イ)認識とは無関係に独立して存在するもの。②主観や自己中心の立場から離れてとらえられた一般的・普遍的存在。)

違い=意味が全く異なっている。「客観主義」(×観客主義)。「客観性」(×観客性)。「客観的」(×観客的)。「この試合の観客数」(×この試合の客観数)。

「観客」はながめる客の意味で、「客観」は主に対するもの(自己に対するもの)の見方(考え)の意味である。両者とも修飾語 被修飾語。

産出—出産 (前者=産物を採取すること。また、つくりだすこと。後者=子供が生まれること。お産。)

違い=両者では意味が全く異なっている。「銅の年間産出高」(×銅の年間出産高)。「産出」は物を作り出し現れ出るという意味であり、「出産」は外に出て子が生まれるという意味である。両者とも並列。

人文—文人 (前者=人類社会の文化・文物。主に「自然」に対していう。後者=文芸・学術に携わる風雅な人。文士。)

違い=意味がかなり違っている。「人文科学」(×文人科学)。「人文主義」(×文人主義)。

「人文地理」(×文人地理)。「文人画」(×人文画)。「人文」は人に関する(武に対し)人間の知恵によって生み出された、学問や芸術の方面のことという意味であり、「文人」はことばをつづってまとめた意味内容を表現するものに従事している人という意味。

「文」の意味合いが両者の間で異なっていることに注意。両書とも修飾語 被修飾語。

名文—文名 (前者=①筋が通り、人に訴える力が備わっている文章。②有名な文章。後者=文筆家としての名声。評判。)

違い=意味が全く違っている。「天下の名文」(×天下の文名)。「文名をあげる」(×名文をあげる)。「名文」は名高い(優れた)ことばをつづってまとめた意味内容を表現するものの意である。つまり、優れた文章ということ(修飾語 被修飾語)。「文名」は武に対し、人間の知恵によって生み出された、学問や芸術の方面のことに関しての誉れ

(聞こえ) のこと。つまり、文に関する誉れのことである (修飾語 被修飾語)。両者とも修飾語 被修飾語。

明文—文明 (前者=①はっきりと示されて書かれた条文。②筋の通った明白な文。後者=①文教が盛んで、人知の明らかなこと。②人類が科学の力により自然物を加工・改良し、外的・物質的生活を発達させた状態。)

違い=意味が全く違っている。「この箇所を明文化しておく」(×この箇所を文明化しておく)。「文明開化」(×明文開化)。「文明の利器」(×明文の利器)。「文明批評」(×明文批評)。「文明病」(×明文病)。「明文」は明らかな文という意味 (修飾語 被修飾語) であり、「文明」は (武に対する) 文を明らかにするという意味 (述語 補語) である。つまり、両者の文法関係は異なっている。

名家—家名 (前者=①有名な家柄。名望のある家柄。名門。②その道に優れた有名な人。名士。後者=①一家の名称。②一家の名誉。)

違い=意味がかなりずれている。「彼は名家の出である」(×彼は家名の出である)。「家名を汚す」(×名家を汚す)。「家名断絶」(×名家断絶)。「名家」は名高い家柄の意 (修飾語 被修飾語) であり、「家名」は家の呼び名および誉れの意 (修飾語 被修飾語) である。両者とも修飾語 被修飾語。

昇降—降昇 (前者=のぼりくだり。あがりおり。後者=くだってのぼること。あがっておりること。つまり、前者と逆の動作を表す。)

違い=後者は国語辞典を引いても、実際には載っていない語句である。普通の解釈からすれば、前者も後者も同じ動作を表していることになる。つまり、のぼってくださるもくだってのぼるも連続した動作であれば、ほとんど違いがなくなることになるからである。ただし、ここでは、一回きりの動作について問題にしているので、意味合いが全く異なっているのである。筆者の手元にある英語音声学の本を見てみると、音調 (Intonation) についての説明の中で、昇降調 (rising-falling tone) と降昇調 (falling-rising tone) という言い方をしている箇所がある (三宅川・増山 1986, pp.122-3)。従って、上がって下がる動作と下がって上がる動作とは、正反対の動きということになる。よって、意味的に大きくかけ離れる場合の例として、ここでは分類しておく。つまり、一般的なことばの使い方ではなく、英語音声学における専門用語としての使い方限定して説明しているわけである。このケースにおいては、昇降調や降昇調という言い方をするよりも、上昇下降調や下降上昇調という言い方をする方が普通である。両者とも時間的前後。なお、一般的なことばの使い方としては、「降昇」という用語は少なくとも国語辞典には載っていないので、ほとんど使われないと考えてよいであろう。「昇降」に関しては、昇降機 (エレベーターのこと) や昇降口というような用法が存在する。(×降昇機、×降昇口)。

田中—中田 (人間の姓についての一例。前者と後者の意味の違いについては、割愛する。) また、データの中の数字にも含めないこととする。)

ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

和弘—弘和 (人間の名についての一例。前者と後者の意味の違いについては、割愛する。)

すなわち、人間の姓名に関しても考えられるということを表した例であるとうことである。また、データの中の数字にも含めないこととする。

1. 1. 4. 2つの漢字の読みを逆さにすると、それに呼応する漢字の組合せが変わってしまう場合  
 臣下—家臣 (前者=主君に仕える者。家来。後者=武士の家に仕える臣下。家来。家人。)

違い=意味にほとんど違いがない。「臣下」は家来で身分の低い方に属している者という意味(並列)。「家臣」は一族の中の家来という意味である(修飾語 被修飾語)。両者の文法関係が異なるということ。

敬意—畏敬 (前者=敬う気持ち。尊敬している心。後者=おそれ敬うこと。)

違い=意味的にはかなり近い。ただし、次のような違いが見られる。「敬意を表する」(×畏敬を表する)。「畏敬の念」(×敬意の念)。「敬意」は敬う気持ちという意味(修飾語 被修飾語)であり、「畏敬」は「畏」も「敬」もうやまうという意味。つまり、上下同義。両者では、文法関係が異なる。

始祖—祖師 (前者=①はじめのもの。元祖。②禅宗で、だるま。後者=《仏》一宗派を開いた高僧。宗祖。)

違い=意味がかなりずれている。「始祖鳥」(×祖師鳥)。「医学の始祖ピポクラテス」(×医学の祖師ピポクラテス)。「始祖」は物事のはじまりと物事をはじめた人の意。並列。「祖師」は物事をはじめた人と先生(手本とすべきすぐれた人)の意。両者とも並列。

閑静—清閑 (前者=人・車・の往来も少なく、静かなさま。後者=①清らかで静かなさま。世の中の煩わしさから逃れて静かなこと。また、その様子。②手紙文で、相手を敬い、そのゆつたりとした生活をいう語。)

違い=②の意味が加わっている分、後者の方が意味が広い。その他の点においては、意味がかなり近い。「閑静な住宅街」(×清閑な住宅街)。「清閑の地」(×閑静の地)。「閑」はしずかという意味であり、「静」もしずかという意味である(上下同義)。「清」はきよらか、すんできれいという意であり、「閑」はしずかという意である(並列)。両者の文法関係は異なっている。

制作—作成 (前者=①芸術作品や番組を作りだすこと。また、その作品。②演劇・映画・放送などを企画立案すること。プロデュース。後者=文書・計画などを作り上げること。)

違い=何かを作ることでは共通であるが、作りだす(作り上げる)ものが異なる。「このテレビ番組は日米合同制作だ」(×このテレビ番組は日米合同作成だ)。「問題を作成する」(×問題を制作する)。「予算を作成する」(×予算を制作する)。「制作」の場合、「制」は作るの意であり、「作」もつくるの意である。「作成」の場合、「作」はつくるの意であり、「成」はなす、作りあげるの意である(両方とも上下同義)。

精神—心性、神性(神聖は違う) (前者=①思考や感情の働きをつかさどる、人間の心。②非物質的

な生命や宇宙の根源と考えられる存在。③気力。根性。④物事の根本。真髓。後者＝心性の場合①天性。生まれつき。②ころ。精神。神性の場合①神の性質・属性。②ころ。精神。)

違い＝意味的にかなり似ている。後者の場合、②の意味では全く共通である。ただし、①の意味においては、「心」と「神」の漢字が違っていることの影響により、違ったニュアンスでとらえられているところが興味深い。「精神機能」(×心性(神性)機能)。「向上の精神」(×向上の心性(神性))。「憲法の精神」(×憲法の心性(神性))。「精神」は物の働きの核心となる力(不思議な力)を持ったころの意であり、「心性」はころの自然に備わる性質の意であり、「神性」はころ(精神)の自然に備わる性質の意である。両者とも修飾語 被修飾語。→「神聖」については、全く違った意味になってしまうので、割愛する。

友好－交友(交遊は違う)(前者＝友だちのよしみ。仲のよい交わり。後者＝①友と交わること。②つきあっている友だち。友人。)

違い＝意味的に近いが、後者には②の意味が加わっている。「友好国」(×交友国)。「交友が多い」(×友好が多い)。ただし、次の例では両方とも可能である。「友好関係」(○交友関係)。→「交遊」については、違った意味になってしまうので、割愛する。「友好」は親しんで、仲よくするの意(上下同義)であり、「交友」はつきあう(交わる)友の意(修飾語 被修飾語)である。

両者で文法関係は異なる。

言説－切言(前者＝ことばで説明すること。また、その説。後者＝相手の胸に響くように忠告をすること。痛切な忠告。)

違い＝ことばで説明(忠告)するところまでは似ているが、後者にはかなり感情的な側面が加わっているため、かなり違ったニュアンスになる。「言説」はことばを説く(述べる)という意味(述語 補語)であり、「切言」はしきりに(強く)言う(述べる)という意味(述語 補語)である。両者とも述語 補語。

当初－初頭(前者＝はじめ。はじめのころ。最初。後者＝(ある時期・時代の)はじめのころ。)

違い＝はじめのころが共通しているので、意味的に近いと思われるが、後者には「ある時期・時代の」という但し書きが付いているので用法には違いが出る。「入学当初」(×入学初頭)。「二十世紀初頭」(×二十世紀当初)。「当初」は当の(問題の、さしあたっての)はじめの意味(修飾語 被修飾語)である。「初頭」は「初」がはじめの意味であり、「頭」もはじめの意味(上下同義)である。両者の文法関係に違いが見られる。

便法－方便(前者＝①便利な方法。②その時の都合でとる一時的な手段。便宜的なやり方。後者＝目的を果たすための一時的な手段。)

違い＝後者と前者の②の意味では、ほぼ同じである。ただし、用法上は違いが見られる。「学問に便法はない」(×学問に方便はない)。「便法を講じる」(×方便を講じる)。「うそも方便」(×うそも便法)。「便法」は都合がよい(やりやすい)手立て(手段)の意

ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

味（修飾語 被修飾語）である。「方便」は「方」が手立て（やり方）の意であり、「便」は手立て（ついで）の意（上下同義）である。両者の文法関係は異なる。

常人—尋常（前者＝普通の人。凡人。後者＝普通。人並み。当たり前。②おとなしいさま。素直なさま。③見苦しくない様子。けなげなさま。殊勝。）

違い＝意味にかなりの違いが見られる。後者は意味が広い。「尋常に白状する」（×常人に白状する）。「尋常に勝負しろ」（×常人に勝負しろ）。「常人」は並の（普通の）人の意味（修飾語 被修飾語）である。「尋常」は「尋」が常、並、普通の意味であり、「常」も並、普通の意味（上下同義）である。

つまり、両者の文法関係は異なっている。

以上、大半は『旺文社国語辞典—改訂新版—』より引用。

なお、太文字や下線、×を伴った例文などは筆者が加えたものであり、用例の一部は筆者の創作も含まれている。

上述の語の文法関係を表にして見ると、次のようになる。

なお、ここで使われている数字は頻度を表している。

2組のペアにおいて、文法的関係が同じペアについては、それぞれ1つずつ別個に数字としてカウントしている。

最初は4つのセクション（1. 1. 1. 2つの漢字を逆さにしても意味にほとんど違いがない場合、1. 1. 2. 2つの漢字を逆さにすると意味に少し違いがある場合、1. 1. 3. 2つの漢字を逆さにすると意味が大きくかけ離れる場合、1. 1. 4. 2つの漢字の読みを逆さにすると、それに呼応する漢字の組合せが変わってしまう場合）について、各セクションの項目別にその頻度を考察して、次に4つの各セクションの項目とその例として挙げているペアの文法的関係についても考えていく。

8つの文法的関係（1. 2. で後述）と漢字を逆さにした時の意味の近さ・遠さとの関連性についての考察も行う。

### 1. 1. 5. 4つのセクションそれぞれの頻度の調査と内容の検討

4つのセクション別に頻度を調べてみると、次のようになる。

#### 1. 1. 1. のケース 2つの漢字を逆さにしても意味にほとんど違いがない場合

文法的関係	A	主語	述語	1	情熱
	B	述語	補語	10	明言、言明、所出、学修、論争、近接、遊歴、歴遊、物産、下降
	C	修飾語	被修飾語	8	出所、修学、熱情、争論、決議、途中、中途、産物
	D	並列		16	先祖、祖先、保留、留保、見識、識見、

			心身、身心、分配、配分、始終、終始、 腹心、心腹、物事、事物
E	選択	0	
F	時間的前後	1	議決
G	従属	0	
H	上下同義	40	慣習、習慣、関連、連関、器機、機器、 栄光、光栄、出現、現出、愛情、情愛、 苦勞、勞苦、議論、論議、評論、論評、 余剰、剰余、回転、転回、集結、結集、 接近、便利、利便、変異、異変、製作、 作製、降下、土壤、壤土、原野、野原、 安泰、泰安、辛苦、苦辛

計 76

## 1. 1. 2. のケース 2つの漢字を逆さにすると意味に少し違いがある場合

文法的関係	A	主語 述語	2	情感、年少
	B	述語 補語	2	感情、敵対
	C	修飾語 被修飾語	2	少年、対敵
	D	並列	6	親近、近親、礼儀、儀礼、読解、解説
	E	選択	0	
	F	時間的前後	0	
	G	従属	2	前面、面前
	H	上下同義	22	対応、応対、階段、段階、法律、律法、 運命、命運、君主、主君、転移、移転、 要綱、綱要、育成、成育、俗世、世俗、 団結、結団、成熟、熟成

計 36

## 1. 1. 3. のケース 2つの漢字を逆さにすると意味が大きくかけ離れる場合

文法的関係	A	主語 述語	2	質素、身長
	B	述語 補語	8	実現、理論、明解、権利、事大、会議 分身、文明
	C	修飾語 被修飾語	34	現実、論理、利権、大事、素質、知人、 人知、所要、要所、議会、事情、情事、 弟子、子弟、身分、心中、長身、数年、 年数、数字、字数、部下、下部、液体、

ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

			体液、観客、客観、人文、文人、名文、 文名、明文、名家、家名
D	並列	8	運氣、氣運、女子、子女、科学、学科、 産出、出産
E	選択	0	
F	時間的前後	3	解明、昇降、降昇
G	従属	4	外国、国外、野外、外野
H	上下同義	7	該当、当該、社会、会社、落下、下落、 中心

計 66

1. 1. 4. のケース 2つの漢字の読みを逆さにすると、それに呼応する漢字の組合せが変わってしまう場合

文法的関係	A	主語 述語	0	
	B	述語 補語	2	言説、切言
	C	修飾語 被修飾語	6	家臣、敬意、交友、当初、便法、常人
	D	並列	6	臣下、始祖、祖師、清閑、精神、心性 (神性) →心性と神性は1つにカウント している。
	E	選択	0	
	F	時間的前後	0	
	G	従属	0	
	H	上下同義	8	畏敬、閑静、制作、作成、友好、初頭、 方便、尋常

計 22

◎表について言えること

1. 1. 1. のケースについて—2つの漢字を逆さにしても意味にほとんど違いがない場合である。

・筆者が推測していた通り、Hの上下同義の関係が一番多かった。76例中40例

(52、6%)。ほとんど意味に違いが出ないので、当然の結果であろう。ただし、上下同義でない例もかなり見受けられるということは、注目に値する。Hの上下同義の次から頻度順に並べてみる。Dの並列が76例中16例(21、1%)→Bの述語 補語が76例中10例(13、2%)→Cの修飾語 被修飾語が76例中8例(10、5%)→Aの主語 述語が76例中1例(1、3%)、Fの時間的前後が76例中1例(1、3%)。

なお、Eの選択とGの従属には、例が見つからなかった。

1. 1. 2. のケースについて—2つの漢字を逆さにすると意味に少し違いがある場合である。

・筆者が予測した通り、Hの上下同義の関係が一番多かった。36例中22例(61、1%)。

このケースも意味的には少し違いがある(別の言い方をすれば、かなり近い)というとなので、当然の結果であると言えよう。ただし、上下同義でない例も見受けられるということは、注目に値する。Hの上下同義の次から頻度順に並べてみる。Dの並列が36例中6例(16、7%)→Aの主語 述語が36例中2例(5、6%)、Bの述語 補語が36例中2例(5、6%)、Cの修飾語 被修飾語が36例中2例(5、6%)、Gの従属が36例中2例(5、6%)。なお、Eの選択とFの時間的前後には、例が見つからなかった。

1. 1. 3. のケースについて—2つの漢字を逆さにすると意味が大きくかけ離れる場合である。

・上記2つのケースと違って、Cの修飾語 被修飾語の関係が一番多かった。66例中34例(51、5%)。これは大変興味深い現象である。その原因については後述する。

Cの修飾語 被修飾語の次から頻度順に並べてみる。Bの述語 補語が66例中8例(12、1%)、Dの並列が66例中8例(12、1%)→Hの上下同義が66例中7例(10、6%)→Gの従属が66例中4例(6、1%)→Fの時間的前後が66例中3例(4、5%)→Aの主語 述語が66例中2例(3、0%)。なお、Eの選択には、例が見つからなかった。

1. 1. 4. のケースについて—2つの漢字の読みを逆さにすると、それに呼応する漢字の組合せが変わってしまう場合である。

・上記(1. 1. 3.)のケースとは違って、Hの上下同義の関係が一番多かった。22例中8例(36、4%)。つまり、上述のケース(1. 1. 1. と1. 1. 2.)と同様である。なぜこのような結果になったのかについての考察は、後述する。→Hの上下同義の次から頻度順に並べてみる。Cの修飾語 被修飾語が22例中6例(27、3%)、Dの並列が22例中6例(27、3%)→Bの述語 補語が22例中2例(9、1%)。なお、Aの主語 述語、Eの選択、Fの時間的前後、およびGの従属には、例が見つからなかった。このケースではHの上下同義の次にCの修飾語 被修飾語およびDの並列がきているところが特徴的である。この3つで22例中20例(90、9%)にまで及んでいる。

#### ◎解説 (speculation)

・今回の調査では、2文字の漢字は200を数えた。ペアにすると100例になる。まだ十分な数とは言えないかもしれないが、ある程度の傾向は見出せたと思っている。

・修飾語 被修飾語の関係では、意味が大きく変わる場合が多い(数年—年数、人文—文人など)。

・上下同義の関係では、意味が近くなる場合が多いが、その近さは一様ではない(①非常に近い場合と②少し違いがある場合、さらに③かなりかけ離れてしまう場合とある)。

①の場合 慣習—習慣、関連—連関、愛情—情愛など。

②の場合 対応—応対、運命—命運、成熟—熟成など。

③の場合 該当—当該、社会—会社、落下—下落など。

さらに、漢字の組合せが変わってしまう場合を考察してみると面白い。

上下同義のペアでは、次の1例である(制作—作成)。



ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

- ・両者の文法関係は異なっているが、意味にほとんど違いが見られない（非常に近い）例もいくつか見受けられて大変興味深い（臣下—家臣、敬意—畏敬、閑静—清閑）。  
 例えば、臣下—家臣のペアについて見てみよう。「臣下」（並列）は家来で身分の低い者という意味であり、「家臣」（修飾語 被修飾語）は一族の中の家来という意味である。  
 結局、ほぼ同じ意味を表しているわけである。漢字の組合せが異なっているので、意味がかなりずれているペアもあるが、意味的にかかなり近いペアもあるということである。  
 意味的にかかなり近いペアというのは、元々その2つの漢字の意味が近いからであろうと思われる。
- ・2つの漢字の順序を入れ替えると、そのペアの文法関係が変わる可能性があるということ。例えば、「敵対」（敵とはりあう）の文法関係は「述語 補語」であるのに対して、「対敵」（はりあう敵）は「立ち向かう相手（人）」を意味するので「修飾語 被修飾語」となる。
- ・上下同義のペアなのに、意味的にかかなり異なっている例に注目すると興味深い。  
 例えば、「階段」と「段階」のようなペアである。「階」も「段」も共に「きざはし（階）」つまり「階段」の意味である。それにもかかわらず、「階段」と「段階」では意外と意味のずれが大きい。  
 詳しくは、1. 1. 2. を参照のこと。つまり、2つの漢字を逆さにすると意味に少し違いがある場合の項である。便宜上、1. 1. 2. の項に分類しておいたが、それぞれのペアをよく見てみると、意味の近さ・遠さの度合いには「温度差」があるようである。
- ・可能性はあるわけであるが、Eの選択という文法関係に相当する例については、今回は1例も見出すことができなかった。その辺の事情については、今後十分に検討しなければならない。今後の課題としたい。  
 なお、ここで取り上げられている文法関係（「主語 述語」「述語 補語」「修飾語 被修飾語」「並列」「選択」「時間的前後」「従属」「上下同義」）については、1. 2. で説明する。

## 1. 2. 文法関係による分類

前述までの説明においては、8つの文法関係に基づいて分類がなされていた。その8つについて、ここで簡単に解説しておく（なお、1. 2. 4. では、並列と選択を1つの項目で扱っているのので、7つに分類して解説している）。

### 1. 2. 1. 主語 述語の関係

国語の口語で「aがbする」「aはbである」を意味する。ただし、漢文では主語が省略される場合が多い。

例：「日没」は「日が没する」で、名詞の後ろに動詞があり、主語・述語の関係にある。

### 1. 2. 2. 述語 補語の関係

国語の口語で、「aを・へ・に・から・よりbする・bである」などを意味する。

例：「読書」は動詞が前にあり名詞が後ろにあり、「書を読む」を意味し、後ろの名詞は前の動詞の

補語である。(この書物では、述語の後ろにあってその述語の内容を補足する語を補語と仮に名づける。これはフランス文法の用語を借りたもので、補語のうちに目的語も含まれるものとする。もし補語のうちから目的語だけを識別しようと思うならば、前の語が他動詞であるかどうかで区別すればよいが、漢文では決定し難い場合もある。)

### 1. 2. 3. 修飾語 被修飾語

国語の口語で「どのような a」「なにの a」「なにでできている a」、および「どのように a する・a である」を意味する。被修飾語が名詞の類のものであれば、修飾語は形容詞となり、被修飾語が動詞・形容詞・副詞の類のものであれば、修飾語は副詞的修飾語となる。

例：「大国」は形容詞が名詞の前にあり、「大きい国」を意味する。

### 1. 2. 4. 並列と選択

並列は a と b。a しおよび b する。

選択は a または b。a しまたは b する。

例：「殺傷」は前後の 2 字が並列または選択の関係にあり、「殺しおよび (and) 傷つける」、または「殺しあるいは (or) 傷つける」ことを意味する。

### 1. 2. 5. 時間的前後

a して b する。

例：「撃破」は動詞が 2 つ重ねられていて、「撃って破る」を意味し、「撃つ」と「破る」とには時間的前後関係がある。

### 1. 2. 6. 従属

a の b (a に従属している b)

例：「城門」は名詞が 2 つ重ねられているが、「城の門」を意味し、前後の 2 字に従属の関係が成立している。なお漢文では、このような場合「城之門」というように、「之」の字を用いることがあり、「之」は英語の of と同様な役目をするが、語順は異なる。

### 1. 2. 7. 上下同義

a = b

例：「慣習」と「習慣」のように、「慣」と「習」の字がともに「ならわし」の意味であり、同義である。

—以上、小川・西田 1957, pp.7-12 より引用 (ただし、上下同義に関しては例が載っていなかったため、筆者が自分で付け加えた)。

つまり、意味による分類を基準として、それぞれの漢字の組合せに対して文法的関係を当てはめて、さらにその頻度を数値化して考察したものが「1. 2 文字の漢字の具体例」である。

## 2. 2文字以上の漢字の組合せなどで興味深い例

### 2. 1. 言語習得—習得言語について

2文字より多い漢字の組合せについて見てみると、面白いことがわかる。

[言語習得] 言語を習得するということ。英語で言うところの「動名詞」に近い感覚。

[習得言語] 習得した言語ということ。英語で言うところの「完了および結果を表す現在完了」に近い感覚。

つまり、後者は言語を習得した今は「習得（マスター）している状態にある」という意味まで含んでいるということである。

1. 1. 3. において挙げた例の中に、現実—実現というペアがあった。

[現実] 現に実るということで、その実った状態を意味している。つまり、もう既にそうなっているということ。

[実現] 実際に現れるということで、その現れた結果を意味している。英語で言う結果を表す現在完了に似ていると考えればよい。

従って、英語では前者には **reality** が、後者には **realization** が相当すると考えられる。

このような「完了・結果」および「状態」のような英文法でよく使われる考え方を導入することによって、漢字の組合せの説明にも効果を発揮することが判明したのである。

### 2. 2. バナナワニ—ワニバナナについて

実在するものではないが、もしこのようなものがあったとしたら、次のような違いがあるであろうということである。

[バナナワニ] 何かの種類ワニだということ（バナナのような黄色っぽい体色のワニ、バナナのような形の頭をしたワニ、食べるとバナナみたいな味のするワニなど）。

[ワニバナナ] ある種のバナナだということ（ワニ皮のような模様のあるバナナ、ワニが喜んで食べるバナナなど）。

このような「名詞」＋「名詞」の組合せでは、最初の名詞は後の名詞が示すものの意味を限定する働きをする（大津 2004, pp.39-40）。言い換えれば、最初の名詞は「修飾語」であり、後の名詞は「被修飾語」であるということになる。つまり、どちらが重要（メイン）であるかと言えば、後の名詞である。このように、日本語では「名詞」＋「名詞」の組合せにおいては、後の方の名詞に重点が置かれるということがわかる。このことは、前述および後述の「物事」と「事物」のニュアンスの違いを説明した時にも適用されているものである。

### 2. 3. 言語心理学—心理言語学について

このペアについても、学問分野として考えてみると、決して同じではないということがわかる。

[言語心理学] 前の名詞 (言語学) よりも後ろの名詞 (心理学) の方がメインである。

[心理言語学] 前の名詞 (心理学) よりも後ろの名詞 (言語学) の方がメインである。

考え方は上述の「バナナワニ」と「ワニバナナ」のペアと同じである。

従って、両者を英語に直してみるとその違いが明らかになる。

前者は、psychology of language と言い、後者は psycholinguistics という。

## 2. 4. 不幸最少社会—最小不幸社会について

このペアを比較してみると、大変興味深い。

このペアは3つの名詞が組み合わさって成り立っていることは、見てすぐにわかる。

つまり、「不幸」と「最少」と「社会」である。

[不幸最少社会] 不幸が最少な社会ということ。

[最少不幸社会] 最少の不幸な社会ということ。

両者とも最後の名詞である社会に2つの名詞が関わっているわけであるが、「社会」の直前に来る名詞と「社会」とのつながりがより密接であるということがわかるのである。

従って、前者と後者では、日本語の母語話者としては、受けるニュアンスに違いがあるということが実感できるであろう。私見では、後者の方が「不幸」と「社会」の関係が前者よりも密接なため、前者より一層不幸な社会という意味が強調されてしまうということである。ちなみに、この後者の言い方は、かつてある著名な人が公の席 (確か記者会見の場) で使用したことばである。「今後の日本は最少不幸社会を目指すべきである」という趣旨のことを言ったと記憶している。本人の言いたかった本意としては、「今後の日本は不幸最少社会を目指すべきである」ということを言いたかったのであろうが、「最少」と「不幸」の順番を取り違えてしまったために、凶らずもあまりよくない印象を国民に与えてしまったものである。

この他、順番を取り違えないように注意すべきものには次のような例もある。

「あの人はいい人だ」

「あの人は人がいい」

この2つの表現も当然違ったニュアンス (気持ち) で使われるものである。

## 2. 5. ありがた迷惑について

この表現については、国語辞典では次のような定義になっている。

「ありがた迷惑」表面的にはありがたいようであるが、実際にはかえって迷惑なこと。

ネイティブ・スピーカーである我々には当然理解できることではあるが、「ありがたさ」と「迷惑さ」を比べてみると、後者の「迷惑さ」の方が優っているということである。

つまり、2つの名詞が並んだ時には、後の名詞の方がメインな要素であるという原則と同じ考え方がここでも当てはまっている。

## 2. 6. 「わが巨人軍は永久に不滅です」と「わが巨人軍は永遠に不滅です」について

ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
 —英語の発想なども視野に入れて—

この表現は、巨人軍のスーパースターであった長嶋茂雄氏がかつて引退セレモニーの際に述べたことばである。長嶋が実際に発したのは、どちらの表現であろうか。実はテレビ番組において、街ゆく人にインタビューして尋ねたところ、10人中8人くらいの人（80%くらいの人）が後者であると答えたのである。実際の正解はVTRで確認したところ、前者であった。

つまり、我々日本人もこのような表現については、多分にイメージとして記憶しており、それが必ずしも現実とはつながらないということを如実に表していると言えよう。確かに「永久に」と「永遠に」とは、意味的に言ってほとんど違いがない表現であるからである。

国語辞典で調べないと、両者の違いを即答するのは難しいことであるが、私見では「永久」よりも「永遠」の方が多少ロマンを感じる表現であるということである。実際に国語辞典を引いてみると、定義上ではほとんど同じ意味であるにもかかわらず、用法上では次のような違いも見られて大変興味深い。

〔永久〕時間の限りなく続くさま。永遠。

〔永遠〕時のながくはてしないこと。時間的に無限に続くこと。とこしえ。永久。永劫。

「永久」には「永遠」の意味が与えられており、「永遠」には「永久」の意味が与えられているので、両者の意味はほぼ同じと言ってもよいわけであるが、次のような例の場合には注意を要する。「永久歯」(×永遠歯)。「永久磁石」(×永遠磁石)。「半永久的」(×半永遠的)。「永遠の美」(?永久の美)。

筆者の一番好きな音楽家 (my favorite musician) であるアメリカのフォークグループ The Brothers Four の名曲“Greenfields”の中に、an everlasting love というフレーズがある。これを日本語に訳すと、「永遠なる愛」ということになるだろう。「永久なる愛」と訳しては、少なくとも筆者にとっては興ざめであり、しっくりこない。私見では、それだけロマンのあるフレーズであるだけに、everlasting の訳語には「永遠なる」の方が適切であるということである。「永遠なる」も「永久なる」も共に英語では everlasting である。

この辺の事情については、日本語に関しては同じネイティブ・スピーカーであっても異なった見解も十分にありうる。

### 3. 日本語表現と英語表現との比較

#### 3. 1. 留学と遊学について

この2つのペアについては、少なくとも筆者にとっては前者の方がより一般的な言い方になっている。

参考までに3つの国語辞典を使って、定義を確認してみよう。

〔留学〕①他国に留まって学ぶこと。

②外国など、よその土地にある期間留まって専門の知識を習得すること。

③ある期間、ほかの土地、特に外国に留まって勉強すること。

[遊学] ① (「遊」は、家を離れて出かけていく意) 故郷を離れ、よその土地や国に行って学問すること。

② (「遊」は、他国へ行く意) 両親の住む家・故郷を離れて、必要な学問を習い研究すること。

③ [文章語] よその土地（・国）へ行って勉強すること。

(以上、①は『旺文社国語辞典—改訂新版—』より、②は『新明解国語辞典—第四版—』より、③は『三省堂現代新国語辞典—第二版—』より引用。なお、下線部は筆者が付け加えたものである。)

3つの辞典とも定義はよく似ているが、下線部に注目してみると、微妙な違いに気がつくのである。

①の解釈＝「留学」は他国に行くこと。

「遊学」はよその土地や国に行くこと。

②の解釈＝「留学」は外国などよその土地に行くこと。

「遊学」は他国に行くこと。

③の解釈＝「留学」はほかの土地、特に外国に行くこと。

「遊学」はよその土地（・国）に行くこと。

表にすると、次のようになる。

	よその土地	外国
① 留学	×	○
遊学	○	○
② 留学	○	○
遊学	×	○
③ 留学	○	○
遊学	○	○

この図を見るとわかるように、①の「留学」と②の「遊学」のところで、よその土地は意味に入っていないという×印がついている。ということは、親元や故郷を離れて行く所が微妙にずれてくる可能性があることを示唆している。②の「遊学」の×の箇所については詳細は不明であるが、①の「留学」の×の箇所についてはやはり妥当性に疑問が残る。「留学」というのは、何も外国に行かなくてもできるからである。なぜならば、「内地留学」という言い方があるが、これは外国ではなく日本国内への留学を意味することばであるのが何よりの証拠である。

いずれにしても、「留学」にせよ「遊学」にせよ、英語では **study abroad** と言い方で表現されるので、日本語における両者の違いは全く反映されないことになる。

この2つの漢字を国語辞典で調べてみて、筆者流にまとめてみると次のようになる。

[留学] ある場所に留まって学ぶこと。文法関係は「並列」である。

[遊学] 学問や観光のために他国へ行って学ぶこと。文法関係は「時間的前後」である。

両者の文法関係が異なっているところが興味深い。

「遊」という漢字があっても別に遊ぶという意味だけではなく、学問することも含まれているのである。従って、「留学」とも意味が限りなく近いものになるのであろう。

ちなみに、和英辞典で「留学」と「遊学」の項を引いてみることにしよう。

◇留学する study abroad

◇遊学する ⇒留学する（留学するの項を見なさいということ）。

手元にある和英辞典2つを見たところ、上記のような結果が出た（『ジーニアス和英辞典[第2版]』と『ルミナス和英辞典[第2版]』）。

要するに、「留学」と「遊学」を区別することはできないということである。

### 3. 2. 運命と宿命について

この2語は、人生論的にはきちんと区別されているようである。例えば、「自分の運命は変えられるが、宿命は変えることができない」というような言い方をする時がそれに該当するのである。

国語辞典を使って漢字の成り立ちを調べてみることにしよう。

〔運命〕①人の意志ではどうにもならない、幸・不幸のめぐり合わせ。宿命。②将来の成り行き。

〔宿命〕前の世から定まっているとされる運命。人間の意志では変えることができない運命的なもの。

②の意味が加わっている分、前者の方が意味が広い。①の意味においては、ほぼ同じ意味のように見受けられるが、前述のように人生論的には意味に違いがあるのである。

「運命」は運ばれためぐり合わせという意味である。文法関係は「修飾語 被修飾語」である。

「宿命」は宿っためぐり合わせという意味である。文法関係は「修飾語 被修飾語」である。

次に、「運」と「宿」という個々の漢字について見てみよう。

〔運〕(ウン・はこぶ) ①はこぶ。②めぐる。まわす。③用いる。はたらかす。④動く。動かす。⑤めぐりあわせ。さだめ。→従って、「運命」は自分から働きかけて、動かす(変える)ことが可能である。

〔宿〕(シュク・スク・やど・やどる・やどす) ①やど。やどや。②やどる。とまる。③とどめる。とめておく。④以前からの。前々からの。⑤前世からの。⑥年功を積んだ人。⑦星座。→従って、前世からとどまっている(決まっている)自分の意志では変えられないこと。

以上、引用は『旺文社国語辞典-改訂新版-』より。ただし、下線部および解釈には筆者の考えが反映されている。

この2語に関しても、「留学」と「遊学」のペアと同様に、英語では区別立てがなく、共に fate, destiny, doom という語が用いられる。

### 4. 今後の課題

最後に今後の課題について、3つの指摘をしておきたい。

- ①「物事」と「事物」の間の違いについて-1. 1. 1. 2つの漢字を逆さにしても意味にほとんど違いがない場合に分類されていたペアである。両者の読み方が異なるということも気になるところではあるが、ここではそのことについては触れない。そこでの説明の中で、一つ大変重要な指摘

がなされていた。「物事」は「物」よりも「事」に重点を置いた言い方であるということである。このことを筆者なりに解釈すると、2つの漢字のうち後ろに来た語の方に重点が置かれているということの意味する。ということは、上述の国語辞典には記載されていないが、「事物」の場合には「事」よりも「物」の方に重点が置かれているということになる。つまり、漢字が2つ並んだ時の重点の置き方の違いということがポイントである。このような考え方をしなければならぬ語句にはどのような特徴があるのか、その特徴を見分ける境界線は存在するのか、またその数はどのくらいあるのかといったようなことについては、今後の課題としたい。

- ②今回は1. 1. 1. 2つの漢字を逆さにしても意味的にほとんど違いがない場合、  
 1. 1. 2. 2つの漢字を逆さにすると意味に少し違いがある場合、1. 1. 3.  
 2つの漢字を逆さにあると意味が大きくかけ離れる場合、1. 1. 4 2つの漢字の読みを逆さにすると、それに呼応する漢字の組合せが変わってしまう場合ということで分類した。なぜこのような違いが生じてくるのか、そのメカニズムの解明が今後の大きな課題である。
- ③「慣習」vs.「習慣」のような漢字の組合せの問題、バナナワニ vs. ワニバナナのような「名詞」+「名詞」の問題、さらには「永久」vs.「永遠」や「留学」vs.「遊学」さらには「運命」vs.「宿命」といった表現を通して、ことばの意味の問題をいろいろと考察してきた。その際に、英語の表現も時折参考にしながら、ことばの特徴について追究してきたものである。認知言語学でいうところの「形が変れば意味が変わる」を合言葉に、今後ともさまざまな違いについて調査し、研究していくことが重要である。漢字の組合せの問題だけではなく、日本語に関してその他の言語も参考にしながら語彙的な諸問題を検討していくことが筆者にとっては今後求められていることである。

## 参 考 文 献

### 辞典

- 市川孝・見坊豪紀・金田弘・進藤咲子・西尾寅弥（編集）（2004<sup>2</sup>）『三省堂現代新国語辞典』東京：三省堂。
- 研究社辞書編集部（編集）（1971<sup>2</sup>）『研究社高校英和辞典』東京：研究社。
- 金田一京介・柴田武・山田昭雄・山田忠雄（編集）（1989<sup>4</sup>）『新明解国語辞典』東京：三省堂。
- 小島義郎・竹林滋・中尾啓介・増田秀夫（編集）（2005<sup>2</sup>）『ルミナス和英辞典』東京：研究社。
- 小西友七・南出康生（編集主幹）（2003<sup>2</sup>）『ジーニアス和英辞典』東京：大修館書店。
- 松村明・山口明徳・和田利政（編集）（1986<sup>2</sup>）『旺文社国語辞典』東京：旺文社。



ことばの成り立ちおよび漢字の組合せに関する一考察  
—英語の発想なども視野に入れて—

文献

- 三宅川正・増山節夫（1986）『英語音声学—理論と実際—』東京：英宝社。  
小川環樹・西田太一郎（1957）『漢文入門』岩波全書 233. 東京：岩波書店。  
大津由紀雄（2004）『探検！ことばの世界（新版）』東京：ひつじ書房。